

若手教員、学生、社会人を対象に

教師志望

人材育成 —— 大阪 中之島

兵庫教育大学大学院同窓会 副会長(研究部長) 中尾 豊喜

「いま、学校の先生になりたい人が多い」と近畿地方の学生達から聴きまです。その動機は、親の期待や安定感だそうです。なるほど、職員室には新卒から三十代後半までの新任教員が続々とやってきましたが、彼らが求めることは、すぐに使える教材や指導方法です。この現実には少々困惑しています。この辺りが今回の主題です。

さて、教育公務員への道は、都市部では既に広き門になっています。今後は地方でも同じ状況でしょう。この教員採用の軋みや年齢構成の歪みは、学校文化に何らかの変容を来たすよう、危惧の念を抱きます。例えば、同僚性、教育観(学力観・生徒指導観)、保護者との関係性などがそれです。

奇しくもこんな折、日本社会は市場主義経済にあり、学校現場も遅れつつもネオリベリズムの影響による成果主義的な思考、悪意はないが本質を見

失った表層・形式的な対応が蔓延って来しました。そして、この無批判な受け入れ方の傾向には(まじめ)という重大な勘違いも手伝って、結果的に教育行為の公共性を縮め、各々の私事化を増幅させました。偶然と言えこの両者の出会いは、《教育》にとつて可視化されない極めて危険な現象なのです。

そこで、同窓会組織において研究部門を担う大阪府支部では、この社会環境の構造的な課題に応じた実践研究に取り掛かりました。その場が教師塾の先駆けとして平成十八年夏、梶田徹一学長先生や川本幸彦副学長先生を迎え開講した「中之島EDJセミナー」です。ねらいは、技能取得のみにあらずして、「なぜ教員になりたいのか」「教員になって何をやるのか、抱く志を確信してもらふことです。その大志が人を導き、かつ心を育む行為に繋がると考えます。つまり、スキル偏重に陥るこ

となく、恒常的に「何のために」を自問自答し、近未来の市民社会建設を射程に構えた教師として、次世代育成に使命感を抱き続けるからこそ、如何なる事例も普遍的な指導を可能にすると言言できます。

方法は、教員を志願する京阪神の国公立大学の院生・学部生、社会人、幼・小・中・高校の若手教員を対象に、講師や同窓会員が理論や実例を紹介し、討議を真剣に行っています。文献輪読会もあり、参加は無料です。

これまで、梶田学長先生の開講記念講演以降、Darryl T. Yagi 先生の米国「Career education」、国語・算数・道徳の授業法、生徒指導、子ども理解、キヤリア教育、発声法、鑑賞教育など実施し、内容に応じ保護者やNPO職員、企業社員とも合同で開きました。

四年目に入り、三月で五十七回を数えます。昨年十二月より大学と共同研究を組み、今後は都道府県連携推進本部やコラボレーションセンター、更に近隣支部とも連携を図りながら充実をめざしています。受講者は、東は台東区立小学校、西は神戸市立中学校へと各地に新任として赴任しました。

しかし、彼らの半数は赴任地で二年も経てば変わってしまいます。それは、先述の成果主義的な思考への感化なのか、現地で無意識に慣れ親しむののでしょうか、これまでの志は縮小していません。仮にこれを日本人の精神構造の特性とみれば、例えば丸山眞男先生の「執拗低音(Basso ostinato)」という教示に照らしても、何が妥当かという論理性ではなく、その場の雰囲気に従うことを善としてしまつては、教員は「反省的実践家」教師には成り得ません。

利点は継承しても、否な点の世代間伝承は再考が必要でしょう。子ども、大人にしろ、私はこの課題克服こそ、正に《教育》という領域がなせる業と考えます。ここに今回の人材育成構想スキームの基点があるのです。



セミナー後の交流会

中之島「ダイビル」内

(19.Apr.2008 撮影:安藤なな子)